

研究ノート

Miss Wade の 〈監獄〉

— Dickens の抑制的な女性 (1)

溝 口 薫

[i]

Charles Dickens の描く女性像が作家自身の負った精神的な外傷や、彼を取り巻いていた女性達の影響を受けて、因習的であるとはよく言われることである。しかしながら、その女性像が、当時の読者層の大半を占めた保守主義的中流階級の理想的女性像か、もしくは強欲や嫉妬などの強い感情を見せるなど彼らの価値基準からそれ、常に嘲笑をもって扱われる女性群に二分される傾向を示すのは、その著作の前半においてのことである。中期の女性像ともなると新しいタイプの女性群が加わるほか、全体としてもそれなりの複雑化を伴って、興味深い様相を呈してくる。例えば、*Dombey and Son* 以降、敏感で激しい感情を持ち同時に（いささか偏ってはいるものの）鋭い知性を秘めた美人達が登場して来るが、彼女達は搾取を受けつつ脱出できない自らがおかれた状況に深く憤っており、普段はその怒りを押え込んで寡黙であるが、時を得ると、その窮境を分析批判して見せる弁舌が与えられるのである。彼女らはしばしば芝居がかって描かれ、一様に破滅的な結末が与えられるのだが、それでも後に出現するものほど、微妙な心理劇を垣間見せたり、またその結末についても保守的価値観からはずれたことの単なる応報として与えられるのではなくなってくる。それとともに善の永遠性の具象であるかのような天使の少女像や、物静かで愛情深いとその知性と行動は家庭を越えて発揮されることが絶えてない家庭の精

霊たちは、その実体のない聖性に少しずつ肉化が伴う。すなわち家庭外へ出てその事情を理解したり行動を起こしたりする認識力や行動力が自我とともに与えられる。相変わらず、いかような窮境にもよく耐え温順ではあるもののそのありようが価値機能としてだけではなく、心理的にも作者に認識され、したがってより説得力を持った時代の理想像として受け取ることができる。¹⁾

こうした女性像の変化は Dickens の女性に対する認識の深まりというよりはむしろ、社会的な問題認識の深まりから来るものであろう。つまり社会がその見えざる制度や機構を通して、女性を含む個人の内面に対していかなる深刻な影響を及ぼしているか——そのことを小説の主題にすえた時からこの変化は始まるのである。(実際 Dickens の他者としての女性、あるいは女性性に対する認識はよく言われるように Ellen Ternan の出現を待たねばならない。) 拙論では作家の最も深い社会的絶望が示されている *Little Dorrit* に見られる一人の女性、Miss Wade に焦点を絞って、以上述べたような強い感情を押え込んだ Dickens の女性像の機能的・心理的深まりを考察してみたい。というのはこの女性が上に述べたタイプの中期最後の人物であって、biographical な形でいかにその内面が諸制度・機構の影響下に形成されたかが明瞭に示されるからである。かつ、女性の美德とされた抑制的な態度に関して Dickens がいかに穿った観察を繰り広げているかをもこの女性に辿ることができるからである。

[ii]

1855年12月から1857年6月にかけて月刊雑誌 *Household Words* に連載された *Little Dorrit* は監獄をその主要なシンボルとして、物質的には繁栄を極めているヴィクトリア朝中葉のイギリス社会の人々がその階層、立場にかかわらず陥っている精神的貧困を一望の下に描き出した小説である。すなわちそれは融和なき世界であり、Circumlocution Office から Marshalsheer 債務者監獄の父、William Dorrit に至るまで、人々は集団であれ個人であれ己の価値を、そ

のものにおいて見出すことを得ず、むしろ文明の産んだ諸制度の名のもとに行われる他者否定、他者を排し陥れる関係切断行為のなかに見出し、互いに被害を与えあって懲りないのである。Dickens がそこに見ていたものは単に階級間の闘争だけではなかった。もっと微視的かつ根本的に人々を相互の融和から遠ざける社会の機構を見ていたのである。Dickens は、今日の社会哲学者達がさまざまな名前を付けているところの諸文明制度の内在化、とりわけ物質的価値観の浸透、ないし物象化の定着を、その末にもたらされる規格化、官僚機構化、管理化を含めて看取していたと言えるのかもしれない。人間の複雑多様な内面を引き裂き、一元化するこうした社会機構の暴力的な働きを直接振り、かつ生き抜くための対抗手段としてその特殊な自意識、欲望を形成してゆく Miss Wade は作品世界の精神的貧困の〈監獄〉に閉じ込められた最たる囚人の一人なのである。

Miss Wade の生い立ちはそれだけで立派な短編小説にもなるかという彼女自身が語る自叙伝において明らかになる。第2部、第21章“The History of a Self-Tormentor”がそれである。もっともこの有名なくだりはもし標題通りのものとして見るとしたら、彼女に差し出された親切を、ことごとく悪く取り、悪感情を抱え込んで爆発させては人生のさまざまなチャンスを自ら潰してしまうひがみ根性の女性、被害妄想的な神経症患者の歪んだ心の映像しか浮かんでこないかも知れない。しかし不愉快な印象を残す内容とは裏腹にむしろ抑制のきいた彼女の言葉が表す物語を、今一度、例えば彼女の分身である Tattycorum の身の上と照らし合わせつつ読み返してみるならば、先ずはその内面形成上に、周囲の人々の接し方が深く関わり、しかもそこに潜む根深い問題に気付かされる巧みな設計になっていることがわかるのである。それは端的に言えば、寛容親切慈愛といった美德の裏に潜んでいるかもしれない隠微な差別蔑視の精神的暴力、また慣習的だというだけで自明的であると思ひ込むような、世の中の常識、通念を正義あるいは事実として疑わない単純な思考がふるうこととなる精神的暴力とも言い換えられるものである。Miss Wade は、憐む

人々の実は優越感を感じるための同情のからくりを憐まれる立場から容赦なく告発する。しかし彼女を取り巻く周囲のありようは彼女の告発にびくともせずあくまでもおだやかにそして圧倒的に屹立している。

Wade は、僅かな財産が残されてはいるものの身寄りがない孤児であり、さらには Panks の証言にもあるようにその名さえ告げられずに預けられた私生児である。(Ⅱ、9)²⁾ 彼女の養育者はその事実を伏せて「自分を祖母と呼ばせて彼女の教える他の子供達とともに育てた」(Ⅱ、21) ののである。それは一見物心つかぬ彼女に対していわば悲しみの種ともなる事実を知らせることをはばかり〈親切な〉配慮とみえて実は、彼女を劣悪な存在として位置づける結果となる。というのは彼女は常に憐みをかけられるべき存在として〈裁き〉の眼差を向けられていたからである。彼女は大人のみならず子供達の中においても決して対等に扱われない存在として位置づけられていたようである。わざとけんかを仕掛けた彼女に対して周囲の子供達は必ず「先に謝り」、「大人そっくり」の「勝ち誇ったような憐みの表情を浮かべる」のである。

実際私生児を生まれながら親の罪が及んでいる罪の子とする偏見が決して Mrs. Clemam や *Bleak House* の Ester の伯母といった予定説に立つ厳格なキリスト教徒達だけに留まるものではなかったことは、親切だが鈍感な Meagles 氏の孤児についての見解にも明らかとなろう。彼は引き取った Tattycorum が癩癩を起し易いのはひとえに「このかわいそうな子がこの世に出る前に母親の胸に荒れ狂っていたものの反映が幾分この子に現れているのだ」(Ⅰ、27) と説明をつけている。Wade も含め私生児はたとえ〈人道的〉な保護を受けてさえ常に劣悪な存在とする無体な規格の視線、あるいは親の罪の証拠ともいうべき passion の印を待ち受ける監視の視線に瀑されているのである。

さらにこうした私生児に対する眼差は、彼女達がそれ故に一層声高く上げる愛情や受容を求めての叫びをそれと認めず、むしろ矯正すべき欠点 “an unhappy temper” (Ⅱ、21) として解釈してしまっている点でさらに問題なのである。もっともこのことは、私生児に対する偏見というよりむしろ養護、庇護

を受ける側の人間一般に対して向けられる眼差、あるいは理解の欠落からくるのである。それは例えば衣食住を与えるという以上の必要に思い至らないという形で出てくるものである。Dickens はさらに Meagles 氏を通してその点を暗示する。Meagles 氏は銀行を引退後自然の麗しい Twickenham にコテージをかまえ、悠々自適の生活を送っているが、その家は、双子の娘のうち健在の娘ミーのために繰り返した大陸旅行で収集した品々がところせましと陳列されている。それはあたかも経済力に飽かして外国の珍品財宝を吸収した当時のイギリスのミニチュア版といったところだが、そうした形で示された彼の物質主義が、そのほんものの善意にもかかわらず、如何ともし難くその心の上にも及んでいることが続いて示されているのである。というのはこれらの収集品を客の Arthur Clenam や Daniel Doyce に見せたあと客間付きの二人の美しい女中達をさして「どうせなら、見て美しいもの（“something beautiful”）を集めなきゃ」（I、16）と述べるのである。彼がかくもあからさまに人間を物化して見る見方を示す部分はあまりないだけにこの箇所は大事であろう。それは憐みをかけられる側の心情の奥深くを思い至らざる所以が個人的な問題を越えていつの間にか意識に浸透している物象化によるものとしてここに示されているからである。

Wade は Tattycorum に自分達は彼らの「善意のおもちゃ」（I、27）なのだと言っているが、篤志家たちに満足を与える便利な方便として、また愛情や受容の欲求の存在を認められず、まともな人間としての扱いを受けないという意味で、それは妥当な表現なのである。彼女はしたがって、いわゆる私生児としての自ら了解しない〈罪〉を〈緩やかに〉監視する規格の眼差の牢獄、さらにはそうした対象を、心情を持たない木石、物のように見なす眼差の見えざる壁のそそり立つ監獄に育ったと言えるのである。

[iii]

さて彼女を取り巻く監獄の壁とは、彼女を〈劣悪な〉存在として緩やかにし

かし確実に否定する他者の眼差ばかりではない。すなわち、彼女を否定する他者の視差はそのまま彼女自身が己を見る眼差となり、彼女は自分自身によって自分を閉じ込める監獄を形成するのである。

周囲の人々に対する己の優越性を勝ち取ることに憑かれていることを端的に表す“I have the misfortune of not being a fool”という言葉でいみじくも始まっている彼女の自叙伝は、物心ついた時点から開始されている。物心つくとは、他者によって与えられる自己のイメージの獲得であり、同時に、自己の見、見られる自己の成立をさすであろう。彼女の物語が、周囲の人々が自分に関して「いつも何かの秘密を隠していることに気付いた」ところから始まっていることは是非注意せねばならない。というのは、それは、先にも触れたように、人の目にはばかられる劣る自分であることを了解せぬままに押し付けられ、実に不安な意識として彼女の自我が始まっていることを示すからである。(Ⅱ、21)

かくて、生まれ落ちてこのかたずっと融和や共感を知らず、自分と他者とは常に受刑者対授刑者という搾取圧迫関係でしかなかったために、あるいは他者の規格、物化の眼差で彼女自身が引き裂かれているために、自分と他者を位置付ける時、彼女もまた、自分自身と他者を同様に引き裂かれた者として見なさざるをえないのである。

例えば愛情深い友に示す彼女の募る執着心の表現が、ともすればその友の心に潜むかもしれない裏切りの審問となっていることに注意したい。というのは、彼女は関わりたい他者ともただ受刑者／授刑者としてしか関われないことを示すからである。Wade は友に「あなたの(裏切りの)心は読めた」と言って責めるが、この時相手が涙を流して〈受刑者〉の苦しみを示してくれれば、始めて彼女はその相手を受け入れることができるのである。彼女はそうした折、彼女を「一晩中抱き締めて」「そのまま死んでしまおう」と思ったこともあることを記しているが、そうしたいささか倒錯的な激しい感情の表出行為から浮かびあがって来るのは、時々言われるように潜在的なレズビアン的な傾向⁹⁾とい

うよりは、満たされない愛情の苦悩の深さと、他者と自己をともに傷つけることでしか他者と結合、自足できない彼女の自我のありようあるいは時代の写しとしての欲望のありようなのである。

さてこの彼女の苦しみをわかち合ってくれるはずの唯一の受容者が、実はその受容と涙の背後に彼女の「不幸な性格」を矯正する目的を持っていたことを知り、彼女は養育者の下を飛び出し、子供の時期を終えている。この出来事は、自分の優越を感じたい人々のおもちゃとして過ごした屈辱的な時期のそれは最も象徴的なそして大きな打撃として記憶されるようである。その後も何度かこの「不幸な性格」という言葉を向けられると、突如いきりたつこととなるが、このことでもその傷のほどが知れよう。この時期を境に彼女の様子が変わるのはしかしそれだけではない。以降彼女は自分を〈搾取〉する周囲に対してむしろ寡黙になり、それとともに己が受けた屈辱に対して意志的な感情抑制を示すようになる。

[iv]

彼女は身分ある人の家庭で住み込みの家庭教師として働くこととなるのだが、この地位が当時極めて曖昧であったことは周知の通りである。世の中の微妙な同情の対象となる生まれに加えて、正確に言えば使用人と教養ある主人側の地位の間であってなおどちらでもない不安定な社会的地位に立ち、彼女は主人側から寄せられる〈親切的配慮〉に一層過敏になっている。一方で彼女は感情を強力に抑制するのである。それは一つには同情の表出によって自己の優越性を誇ろうとする周囲に対して、むしろいかなる感情も見せないことで彼らに優越を誇り返すというねらいがあるのである。Kucich によれば当時には男女を問わず欲求や感情表現の抑制はその内省性の深さの（引いては社会的地位の）印であった。言わば彼女の抑制はこの通念を逆用して周囲に圧倒されない自我を掴みとろうとする試みと解せられる。⁴⁾

勿論 Wade の抑制は欲求を忍ぶことで意識内の内圧を高め、より高次の欲求

を実現させる昇華を果たして行くような積極的抑制ではない。それは相手の問いかけに対して無反応であることにより他者のもくろみを覆し、狼狽させるためになされているという、むしろ彼女の強迫的で攻撃的な欲求と合体しているところの抑制なのだ。したがって彼女は、一見感情をコントロールし、「自立」を誇示しているようでいて、決して内的自由を得ているとは言えないのである。実のところ、彼女が抑制によって勝ち得る己の優性とは自己の内面に対する力として認められるものではなく、他に対する権力として主観的に解釈される類のものであり、虚妄に過ぎないのである。Wade は勤めた家庭の先ざきで、受けた親切の魂胆を挫こうとして過度の謙譲をその態度に表して周囲を困惑させる。しかし彼女が行っている自己否定による周囲への攻撃は反逆としてみても価値がない。というのは、幼き日より彼女を閉じ込めている規格化、物象化の眼差の牢獄をうち壊すのではなくて、自分からさらに同種の方法による暴力を仕返しするものに他ならないからである。

実際 Wade は同情に潜む欺瞞、そして憐みによって自らの優越性を確かめるテクニックの存在について確信してはいるけれども、こうした欺瞞や精神的な搾取を非難攻撃することだけでは本当の意味で自分を解放することにならないことに気付いていない。その盲目性は結局物心ついて以来、他者との関係が互いに対する社会的権力を相争う非共感的・固定的関係に終始していたことによるのであろうが、そうした彼女の悲劇性は、Wade の語る最後の勤め先での出来事において最も痛烈に示される。

その裕福な老夫婦の家庭で Wade は結婚を申し込まれることとなる。相手はこの夫婦が育ての親となった甥なのであるが、おそらくこの人物は決して彼女の心性を深く理解した上で結婚を申し込んだのではない。ただ彼の誘いに決してなびかず、決然として〈控え目〉であって、端麗であったので、好ましく思ったのである。いうなれば当時の通俗的な理想を彼女の上辺に観た単純で素直な青年であった。その意味でこの恋愛は極めて皮肉な事件なのである。⁹⁾ もっともこの無邪気で外向的な青年は同時に愛情深い性質であったようで多大な賞賛を

無口な彼女に捧げ、融和に努める。そのために昔と同じ理由から、彼女はこの青年に激しい執心を覚えるようになる。彼女にとって他者からの受容、賞賛はその傷つけられた自己には最も求めていたものであったはずである。が、他者とのそのような平和な共存関係、或は共感関係に、むしろ不安になったのだろうか、⁶⁾ あたかも彼女にとってよく知悉する権力闘争関係を故意に作り上げるがごとく、彼や周囲の人々の関心と祝福に、彼女をありがたがらせて誇ろうとする動機を捜し始めるのである。

そうした中に Henry Gowan がやってくる。彼は Barnacle 一族に用意されている出世コースから落ちこぼれたことから全ての良き価値を些細なものとして見なす冷笑家となった青年であるが、人生を斜に眺めてきただけに人間観察は巧みで、Wade の様な不満をかこつ人への取り入り方も心得ているのである。自らのありようについて偏った認識しか持たない Wade は、たちまち「鈍感で退屈な」人々を嘲笑する彼との否定的な連帯に魅せられてしまうことになる。彼女は Gowan の cynicism の恐ろしさに気付いていないわけではない。というのは彼女は彼を見るや「あらゆるものを死にかえてしまうような、dance macabre の骸骨」(II、21) を連想しているからである。しかし彼女の内に形成された分裂的で不安定な自我のありようは Gowan の魅力にあらがえないのである。

人生経験の乏しさとやせた自我への根深い不満が、冷笑的な男性への傾倒へつながってゆくという点で、Wade の Gowan に対する恋愛感情は、*Hard Times* における Louisa の Harthouse に対するそれに通じるものである。そして Harthouse もそうであったように、Wade が「Gowan だけがわたしの安らぎでした」と述べるにもかかわらず、彼の方はただ事態を混乱させる楽しみのために彼女の相手になっているだけの男であった。婚約を一方的に破棄して出奔した彼女を追いかけてきた Gowan は「飽きるまで」彼女の相手をするのであるが、やがて体よく別れてしまう。この結果彼女はその始めに周囲の人々によって押し付けられた不当な烙印通りの存在になるのである。実際捨てられた

恋人は当時の世間の目には墮落した女であった。そして Wade もその通り自らの人生の挫折を決定視するからである。彼女が「今では」自分と同じ様な不幸な女を見ることしか「残された僅かな」楽しみがなくなった（Ⅱ、21）と言っているのは、そのことを示している。この様な経緯で生きながらにして早くも人生を閉じた彼女はその人生の本当の最後まで他者を責め続けることをやめない。この点で彼女はこの系列に属する女性の中で最も深刻な人物なのである。自分と同じ苦しみをなめた Tattycorum を「救出する」と言いながら、苦しみから解放するのではなく、彼女の愛心をあおりたてては責めるという行為を取らずにはおれないのである。それは彼女の特殊な病疾の恐ろしさというよりは、ことほどさように自らを全体的な存在として生かし切れない歪んだ欲望を産出する社会のありようの恐ろしさが示されているものと考えられよう。

註)

- 1) Michel Slater, *Dickens and Women* (London: Dent & Sons, 1983).
- 2) Charles Dickens, *Little Dorrit* (Harmondsworth, 1976) 以下引用言及の箇所は Penguin 版により、次の要領で Book 数及び Chapter 数を示す。（Ⅱ、9）。
- 3) Angus Wilson, *The World of Dickens* (New York: Viking Press, 1970), p.241.
- 4) John Kucich, *Repression in Victorian Fiction* (Berkeley : University of California, 1987), pp.1-33, pp.252-83.
- 5) なぜなら彼女がパメラのように主人側の〈誘惑〉にのらないのは、貞節を意識するからではなく、内面の深さにおいて対抗しようという意図のゆえだからである。
- 6) Alistair M. Duckworth, "Little Dorrit and the Question of Closure," p.111, *NCF*, 33 (1978), pp.110-30.

Summary

Miss Wade in Prison: Dickens's Repressive Women (1)

Kaoru Mizoguchi

In his novels of the middle period after *Dombey and Son*, Dickens shows more concern with the plights of middle class women as well as with their interiority struggling with and disrupted by their situation.

Such concern, however, does not make Dickens an advocator for women, nor indicates that his understanding of woman as the other has become deeper. Rather, this means that so much more serious has become his apprehension of the contemporary society with its disruptive influences upon the interiority of the individuals including women's. To Dickens, the women characters are the more effective and convenient instruments with which he can convey his own insights into the predicament of the modern self.

In this brief study, I will take up Miss Wade in *Little Dorrit*, one and the last of the type newly introduced in the period who articulates the plight and emotion but usually looks strongly repressive, so that I may clarify the author's socio-psychological concerns well developed in her.